財団法人国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
(TJF)

ISSN 0919-7265

国際文化フォーラム通信

2007年
4月発行

no. 74

特集
高校生から届いた想い

フォトメッセージコンテストの10年をメッセージで振り返る

1997年に開始した「高校生のフォトメッセージコンテスト」が、今年10周年を迎えました。このプロジェクトは、高校生が撮影者と主人公（被写体）になって、日本の高校生の生き方や暮らしぶりを5枚の写真と文章で表現し、同世代の若者に伝えるというものです。これまでに、2,648作品（写真13,240枚）が寄せられ、5,296人（撮影者と主人公の延べ人数）が参加しました。

参加者にとってこのコンテストは、単に写真の芸術性を競うためのものではなく、写真を撮るという行為を通じて、身近な人との関係を見つめなおし、自分の生き方についてより深く考えるための場として発展してきました。作品づくりを通じて、身近に存在しているものにこそ驚きや感動が満ちているものだということを発見した高校生は、自分の心の底から湧き上がってくる力強いことばで、自分の想いを語ります。

今回は、この10年に寄せられた数多くのメッセージの中から、特に印象的だったものを選んで紹介し、コンテストの歩みを振り返ります。

特集 p.1
高校生から届いた想い
フォトメッセージコンテストの10年をメッセージで振り返る
とにかく、友だちがイチバン！
将来の夢に向かって
社会とのかかわり。家族とのつながり
高校時代の写真が、今の「土台」になっている
まず一度、すべて受け入れることからはじまる

シリーズ p.10
見る聞く考えるやってみる授業 34
平和へのメッセージが伝わる戦争学習を

TJFニュース p.12
第10回高校生のフォトメッセージコンテスト入賞作品決定！　ほか

お知らせ p.16

とにかく、友だちがイチバン！

高校生にとって、何よりも大切で、かけがえのない存在、それは友だち。友だちについての話題は、この10年間、最も頻繁に登場するテーマでした。撮影者が主人公の素顔を撮るためには、まず自らの心を開いて、相手に歩み寄る必要があります。撮影者の気持ちが主人公に届いた時、二人は向かい合い、互いの存在を敬い、大切に思う気持ちが生まれます。

：メッセージ　：撮影　［　］内の年は、コンテスト開催年。

撮影を通して、「親友」になれた

津田幸奈［2000年］

小学校3年生になった春、私は突然、学校に行くのが嫌になり、行かなくなった。それから2年間、一度も学校へ行くこともなく、外へ出るのも、人と会うのもどんどん嫌になっていった。そんなとき、カウンセリングの先生に、フリールームというのがあると紹介されて行くことにした。それがきっかけでマキっ子（主人公）と出会うことになる。なぜか彼女とは気が合い、なんでも話せた。

高校で写真部に入った私は、このコンテストのことを教えてもらい、マキっ子に主人公を頼んだ。5枚全部ができたときは、撮影を始めてから何ヵ月もたっていた。大変だったけど、この撮影を通して、新しい彼女を見ることができた。彼女の今の生活や、今まで以上に彼女のやさしさが、カメラを通して見えた。そのことで彼女により近づくことができ、「友だち」から「親友」になれた感じがした。

彼女に出会えたことで私は、不登校でよかったと思えた。学校に行っていたら一生、出会うことができない人たちに出会えたから……。2000年、二人は大きく変わった。

津田さんは、2000年から2002年までの3年間、毎年マキっ子さんを主人公にした作品を送ってくれました。二人が出会えたことの喜びと二人のつながりを作品の核にしながら、主人公の友人関係や姉妹関係を撮った写真が加わっていき、年々二人の世界が広がっていくのが感じられました。

心と心が通い合う
二人の強い絆［2000年］

二人の毎日が笑顔で
あふれているようだ［2001年］

マキっ子さんの学校祭に
遊びにいったときの一枚［2002年］

さりげない日常の一コマから、
姉としてのやさしさが伝わってくる［2002年］

悩みぬいて自分を見つめる時期

写真を撮った日、私がふと軽い気持ちで夢について話すと、裕芙ちゃん（主人公）も声優という夢について真剣に考えていて、前に進んでいるんだと思ってうれしくなったよ。裕芙ちゃんは人よりやさしいから、よく自分に腹をたてたり自信を失ったりして悩んでいるけど、その分あなたは強くやさしい人間になってると思うよ。私もそんなあなたに会うと元気がでてきて、悩みごとがあっても、自分だけの悩みじゃないことが分かったりする。こういうとき友だちっていいと改めて思う。

皆が皆、かっこよくなんて生きられない。むしろ一見かっこよく見える人の方が、苦労や努力をしていたりする。私は高校時代とは、悩みぬいて自分を見つめる時期なんじゃないかと思う。だから「どうして自分ってこうなんだろう?」と悩むのは、決してマイナスではないと思う。いろんなことを考えて体験して、そして自分自身で答えを出す。それが、とても青春だと思う。

西岡明日香［2002年］

相手に思われたとき、相手を思うことができる

初めて彼女に会ったときから私は彼女に憧れていたのかもしれない。気づけば5年も友だちで、だけど私は彼女のこと何も分かってないな……。私ばっかりがベラベラしゃべって、彼女は聞き役。いつもいろいろ聞いてもらってる。私はそれが幸せで、彼女の家に行くといつまでも居座ってしまう。それでも彼女は笑ってくれて、申しわけないと思いながら甘えてしまう。そんな彼女が、楽しいと笑うとき、バイバイと手を振ってくれるとき、私は「ありがとう」と思う。

彼女は覚えていないかもしれないけど、中学の卒業アルバムに「まおちゃんは特別な友だち」と書いてくれたとき、私にとっても彼女は「特別な友だち」になった。人は特別だと思われたとき、特別だと思うことができるのかなとそのとき思った。たぶんそれは世界共通。相手に思われたとき、相手を思うことができる。

竹田麻央子［2002年］

友だちの中に私の居場所を見つけた

私とあんちゃん（主人公）の出会いは、図書室。二人とも、毎日放課後になると、図書室に通う。それまで、ぜんぜん話したことなくて、お互い一人ひとり別々の机で勉強していたけれど、今では肩を並べて仲良く座っている。二人の共通の趣味は読書。大学で文芸を勉強するあんちゃんは、たくさんの本をすぐ読み終えてしまう。私はあんちゃんの読んだ本が気になって、追いつくように頑張って読むけれど、やっぱりかなわない。

みんなのリーダー的存在のあんちゃんは、誠実で頑張り屋さん、なんでも一人で背負ってしまう。その背中は、なんだか重そう。私に半分わけて？　だって、あんちゃんは、いつも私を助けてくれた。そして、夢に向かって頑張るあんちゃんがいるから、応援してくれるあんちゃんがいるから、私も自分の夢に向かって頑張ろうと思う。

実はね、いつも図書室で見かけるあんちゃんにひかれるモノがあったんだ。あの時、思い切って話しかけてよかった。あんちゃんと友だちになれてよかった。心からそう思う。もう卒業で、いつも一緒の図書室にも残りわずかしか通えない。だけど、友だちの中に私の居場所を見つけたんだ。だから、もう寂しくなんかない。

木村美和［2003年］

飾らない自分がきっと一番きれい

私は化粧をしている。クラスの女子のほとんどが化粧をしている。髪の毛を染めて目立っている人もいる。その中で、化粧っけがないあっちゃん（主人公）はきれいだった。一人だけ違う光を放っているように見えた。化粧がいけないとは思わない。そういう私も、化粧があるからこそ自分を表現できる一人だから……。

私は中学生のときいじめられていて、そんな自分を変えたくて化粧を始めた。そのおかげで自分に自信がつき、性格も明るくなった。でも、今でも友だちに素顔を見せるのが恐い。そんな私の空想の主人公があっちゃんだった。本当は自分があっちゃんのようになりたかったんだよ。

あっちゃんに「かわいいね」と言うと、「何言ってるの？　私なんておばちゃんだよ!」と、素直な笑顔と一緒に意外な答えが返ってきた。あっちゃんは性格も飾らない。普通の女の子はカメラを向けると、少し恥ずかしがるけど、あっちゃんは堂々として自然にしている。それは自分があるからこそできること、飾らない自分がきれいなことを知っているからできることかもしれない。飾らないあっちゃんの笑顔、真剣な顔、心が好き。私はもっとあっちゃんを知りたいと思った。写真を撮りたいと思った。

久我尚美［2005年］

日本紹介から国際理解教育の試みへ

「日本の若者は、毎日何をして、どんなことを考えているのか」という海外の高校生や日本語教師から寄せられる疑問に応えるために、TJFはこのコンテストを1997年に開始しました。日本語教育に役立つ写真の提供を主たる目的にして、募集作品のテーマを「日本の高校生の日常生活」としました。集まった写真は学校や家庭における主人公のさまざまな生活ぶりを紹介したものが多く、海外の同世代を意識した「日本の若者の自然な姿を見てほしい」といったメッセージが目立ちました。

その後、作品づくりを通じて、「撮影者」と「主人公」として向かい合った日本の高校生に、自己肯定感や互いを大切に思う人間関係が生まれつつあることが分かりました。そこで、第4回（2000年）からは「日本」や「日常生活」といったキーワードを強調せず、テーマを「友だちの素顔」として、このコンテストを、身近な人々と向きあって自分自身を見つめなおす学びの場にするようにしました。そして、作品づくりを通して得られる経験が、異なる文化的背景を持つ他者との共生においても有効であるとの考えから、コンテストを国際理解教育の一環として位置づけました。その後は、撮影者と主人公の内面を描いたもの、家族、アルバイトなどを通じて経験した社会との関わりなど、テーマが多様になっていきました。

西 美有紀［1997年］

阿部紳二郎［1997年］

山本有美［1997年］

熊谷法子［1997年］

将来の夢に向かって

作品づくりの過程で、参加者は身近な他者である友だちの存在を見つめなおすことになります。友だちの生き方に触れて、今度は自分自身の生き方について考えはじめます。日々、楽しく笑いながら、もがき苦しみながら、自分の心で感じたことをことばにしはじめます。そして、自分というものが分かりかけた時、将来の大きな夢に向かって歩きはじめます。

自分という人間が分からない

最近なぁーんもしてない。マジやばい。すべてがなぜかつまらんようで、どうでもいいようで。だいいち自分って人間、ほんとわけ分かんない。あれこれぶつかってたら、意志をなくしたというか、夢はすごく遠く感じるばかりで……。なまけてるのか弱くなっているのか分かんない。なにかがすごく必要。何度つまずいても力いっぱい立ちあがれる私だったのに。今じゃ、つまずいて倒れてんのか、立ちあがって遊んでいるのかすら、分かんないや。

真実を見なきゃ。きっと、大丈夫。今はとにかくつき進んでいくから。この先に答えがあるかどうか分からなくても、いや答えがないのが本当の答えなのかもしれない。受け入れるべき真実を素直に受け入れながら、私を強くする。もっともっと強くなったら、受け入れられないものを変えてしまえる自分になれるかも。それに、もっともっともっと強くなったら、大きな夢が少しずつ近寄ってくるはず。

金 雅英 **石 政美** [2000年]

何をしてもいいから生きていて！

友だちが自殺した。イジメとか勉強が原因ではない。何か自分のなかに腑に落ちないものがあって、そこから自分の弱さが見えてきたことが原因だったらしい。それは僕にとって2度目の友だちの死であった。一度目は小学生のときの友だちの交通事故。でもそのショックは変わらない。とくに自殺は、あまりに悲しすぎる。

16、17歳の少年に人生のすべてが見えるはずもない。死んでしまったら、そこで終わってしまう。不幸のなかで人生を終えることほど悲しいことはない。何をしてもいいから、生きていないとダメだ。好きな友だちとしゃべって、肌で何かを感じて、いろいろな景色を見る。それだけで幸せなんだから。

柴田直哉 **柏木将宏** [2000年]

アホなことをして、バランスをとる

「学校が楽しくない」と彼女は言う。彼女は何か打ちこめるものも、真剣になれるものも、持ってないのだろう。でも私は、何か大切なものや頑張れるものを持っている子よりも、何もない子たちの方が多いと思う。私は前者がいいとも後者がいいとも思わない。なぜなら、この年齢で何か先に進めるものを確実につかんでいる人の方がめずらしいと思うから。

自分には何もないことに気づいて、これじゃああかんともがいて、それでたどりついたのが、アホなことやってバカ騒ぎしたり、アホなことやって楽しく生きること。何もないように感じるかもしれないけど、アホなことほど楽しいことはないのだ！

思い悩むことも必要だし大切だけれど、ちょっとアホなことをしてバランスをとっている、そんな高校生が彼女だと思う。

上田静香 [2001年]

もう一度、夢と向き合ってみよう

私は努力というものが苦手だった。勉強も部活もいろんなことを頑張ったふりして、周りの人や自分をごまかしてきたと思う。自分でも精一杯やっているつもりなのに、いつもどこかで手を抜いていた。甘えていた。ずるかった。

振り返ると、「やったこと」はたくさんあるのに、「頑張ったこと」がないのに気がついた。「若いのに、頑張ることをおこたって嫌だね」と第三者のように笑ってしまう。そんな自分に最近あきてきた。

私には小さいころからの夢がある。「ムリだ」と半分あきらめていた夢。でも、あきらめきれない自分がいて、周りが進んでいくことにどこかで焦っている自分がいた。もう一度、夢と向き合ってみよう。まだ一歩も進んでいないけれど、大切な夢だ。これに対してだけは言い訳しないで、やれるところまでやろうと思う。

小野寺 愛 **小山 舞** [2001年]

写真を通して自分自身を探ろうとした

田中君（主人公）を撮影していて、人にはいろんな「顔」があるなと強く感じました。彼は高校生であり、実家が恋しい息子であり、働く男であり、ピーターパンの心を持った少年であり……。私が見たのは田中君のほんの一部。彼は他にもたくさんの顔を持っていることでしょう。人とのつながりの深さは、その人と共に過ごした時間とその人のホントの顔をどれだけ知っているか、また仮面を外した自分をどこまで素直に出せるかに比例するのではないかと思いました。

私がこれまで人物をたくさん撮影して知ったことは、人物を撮影するというのは「自分自身を撮影していることにつながる」ということです。誰に対しても「壁」を作っていたころの私にとって、ファインダー越しに見る世界は異空間で自分だけの世界でした。壁の必要がない世界は本当の自分が抑えていた感情であふれていました。それから少しずつ素直になろう、写真を通して自分自身を探ろうと思いました。

でもやっぱり、抑えてきた自分を知るのは怖いです。田中君を撮ることでまた新たな自分を見つけるのが怖くて、壁を作ったのだと思います。壁があってほんの一部の田中君しか見られなかったけど、彼を撮ってよかったと思います。ピーターパンの顔を持つ彼に「いろんな『顔』があっていい。そのすべての存在を認めてあげられるなら」と、教えてもらったような気がします。

中才知弥［2003年］

ありのままで生きている彼女

私はいつも外見ばかりを気にしてしまう。でも中身がないなんて言われたくない。本当は自分のありのままの素直な気持ちで生きたい。私だけじゃないと思う。誰だってときには自分のありのままの姿を受け止めてほしいと思うはず。居心地が良いと言えない教室では、話し声、視線……、必ず何かが気になって仕方がない。

はっち（主人公）を見ていて、どんなに楽しいんだろうと思った。それで、気づいたことがある。自分の好きなことを楽しめばいい。周りを気にする必要はない。うれしいとき、怒るとき、泣きたいとき、楽しいとき、そのありのままの姿を体全体で表現できたときこそ、心が生きている。はっちは、ありのままで生きている。私も素直に生きたい。ねぇ、今からでも、もっともっと笑えるよ。

梅澤 葵［2004年］

作品に見る高校生の変化

友だちの大切さ、部活や勉強で頑張る姿、将来への不安や悩みなど、作品のテーマは10年前も今も大きく変わることはありません。戦争、テロ、少年犯罪、不況など、さまざまな出来事に敏感に反応したコメントも毎年送られてきました。また、学校と家庭を中心にした高校生のライフスタイルや、服装や髪型など若者のファションに大きな変化が見られないためか、10年前の写真を今見てもさほど古くささは感じません。

一方、高校生を取り巻く環境で最も大きく変化したのは、何といっても携帯電話の普及です。第1回コンテストを開催した1997年は、携帯電話を持つ人が急激に増えはじめた時期だったのですが、すでに作品にも携帯電話で話す高校生が登場しています。その当時、高校生の間でさかんに使われていたポケベルは、今や完全に姿を消し、携帯電話を持つことは高校生にとって特別なことではなくなりました。友だちと頻繁にメールをやりとりしたり、携帯サイトで音楽やゲームをダウンロードしたりと、彼らにとって携帯電話は必要不可欠なツールになっています。また、ここ数年は、ホームページやブログの話題がたくさん登場するようになりました。第10回コンテストには、俳優のファンサイトで知り合ったという二人が参加して入賞しました。

吉田篤史［1997年］

黒田明子［1998年］

中島成美［2006年］

甫足佳那子［2006年］

社会とのかかわり。家族とのつながり

国際問題、景気の動向、少年犯罪など、参加者はそのときどきのニュースにも敏感に反応しています。一般論として借り物のことばで語りがちな問題を、身近な物事を拠りどころにして、自分自身のことばで語っているのには目を見張ります。家族や友だちとのやりとり、アルバイト先での経験など、毎日のなにげない出来事の積み重ねが彼らの力になっています。

もっと障害者に理解を

学校で親友と呼べる人もなく、いつも寂しそうにしていた彼。そんな彼の学校外での様子を撮ってみたいと思った私は、仕事中の彼を撮ることにした。彼は障害者の介護をしているのだが、優しい眼差しで少年を見つめていた。学校の中では見れない本当の彼を見てしまった私は、鳥肌がたった。彼の仕事ぶりを見て私自身も撮影を中断し、少年と接することに夢中になった。

知的障害者・身体障害者の人たちは歩くことが困難なので車いすで移動する。彼らと街を散歩していろんなことに気づいた。日本でも障害者に配慮した街が増えてきているようだが、実際には十分ではないところもたくさんあるのではないだろうか。そしてもうひとつ気づいたこと。行き交う人たちが彼らを見る。特別な目で……。とてもいやらしい目つきをしているのに気がつき、悲しくなった。どうしてそんな目で見るのだろうか。障害者だから？ 彼らはことばに不自由でも人間特有の「喜怒哀楽」の感情を持っています。いやなときには顔をしかめ、嬉しかった時には周りの人間もつられて微笑んでしまいそうになるくらいのまぶしい笑顔を見せてくれる。そんな彼らを知らずにいる人たちがいることを、残念だと思う。日本だけでなく世界中の人たちがいろんな人と出会い、触れ合い、障害者を理解してあげてほしい。

辻 幸代［1999年］

本当は誰かに話を聞いてほしい

最近、気になる話題は、17歳の少年犯罪。自分も17歳なので、一時はこういう人の気持ちも分かるときがありました。自分も壊れそうだったから。17歳の少年たちは、誰かに助けを求めているんじゃないかな。本当は誰かに話を聞いてほしいのだと思います。

私は今、仲間や家族に迷惑をかけながら、みんなに支えられていると感じます。そう、今の私はへなちょこだった私から脱したんです。だから苦しくても今を精一杯生きようと思います。

「今を大切に」ってこういうことなんだと、やっと最近分かってきました。

田中理喜［2000年］

今ある私は、すべて家族のおかげ

最近、私は「菅原千明」でよかったと思う。父ゆずりで地理が得意な私は、修学旅行の自主研修で予定コースを迷うことなく全制覇した。ハードスケジュールにもかかわらず、体調は絶好調。これは母ゆずり。おみやげはみんなに喜んでもらえた。これは祖父ゆずり。家族に4泊5日分の思い出を臨場感たっぷりに語る私。これは、祖母ゆずり。

反抗期のころ、「自分は一人で大きくなった」みたいなことを、よく言ってたと思う。けど気がつけば、私の性格、クセ、好みはすべて家族のおかげで形成されてきた。今までの思い出もすべて家族のおかげだった。私に影響を与えてくれたたくさんの人との出会いも、すべて家族のおかげだと気づいた。それで、私は「私」でよかったと思う。

菅原千明 **小野寺美知**［2000年］

夢はないけど、人間的に尊敬できる彼

しんちゃん（主人公）は休みになると、毎晩友だちと一緒にコンビニの前にたまり、夜を明かします。とても迷惑な人たちです。でも私は、そんなしんちゃんに憧れます。自分とは正反対の自由な性格で、一見何も考えていないようだけど、実は誰よりも考えてたりするからです。夜、外に出るのは、実は家に帰ることができないからです。本人はめっちゃ帰りたがっているし、親のことをすごく心配したり、私のこともとても気にかけてくれます。最近、自分のことばっかりで、偉そうに自分の夢を語る人もいるけど、私はそんな人をすごいとは思いません。夢を持つのも大切だけど、その前に人間的に出来ていないとだめだと思うのです。しんちゃんは毎日ふらふらしてるし、夢はないけど、優しい性格と、しっかりした考えを持ってます。私はそんなしんちゃんを尊敬していたりするのです。

伊藤菜々子［2001年］

兄を見つめて、平和な世の中について考えた

兄は勉強が嫌いで、部屋はめちゃくちゃです。だらしない生活をしています。夏はパンツ一枚で、家の中をうろうろしています。それは、二つ年下の私にとっては、いいものではありません。「お兄ちゃん、ズボンはいて！」。それが、私の切実な願いです。

私は写真部に所属しています。カメラを通して見ると、兄はいつもと違う気がします。いつも一緒すぎて、気がつかなかったことに気づくことがあります。眉毛を抜いていること、おでこに段がついていること、それから、もしかして大学に合格したら離ればなれになること。ケンカもしますし、特別仲の良い兄妹というわけではありません。でも、兄がいなくなったら、絶対に寂しくなると思います。

兄は私を守ってくれているのだと思います。小さいときからずっと、学校が終わって親が帰ってくるまで二人でした。ああしろ、こうしろとガミガミ、母以上に言うのはそのせいかもしれません。今でも、私が部活で遅くなると、意味不明の電話がかかってきます。みんなは、「おかしなお兄さん」と言いますが、あれは無事の確認なのかなと思います。

このごろ、ニュースを見ていて良かったなと思えることがありません。もしかしたら、私の周りのささやかな幸せを守ることは、すごく大変なことなのかもしれません。今の私は、将来についてのはっきりした目標はありませんが、平和な世の中に暮らしたいという希望はあります。そのために、私にもできることがあるはずだと思います。みんなが身近な人を思って暮らしたら、平和にもうちょっと近づくような気がします。

乗田摩美［2003年］

一人の思いが何かを動かす力になる

あたしらは幸せだ。朝ごはん食べて、学校行って、友だちとたくさん話して、帰ったら迎えてくれる家族と家があって、晩ごはん食べて、テレビ見て、寝る。こんな当たり前のことを、何気なく毎日繰り返している日々。だけど、同じ地球上でも、あたしらみたいに何不自由なく暮らしている人もいれば、幼いころから労働を課せられている子や飢餓で苦しんでいる人も多くいることを忘れちゃいけない。季節が変われば、あたしらは進学や就職など夢に向かって一歩を踏み出せるけど、苦しんでいる人たちはその一歩さえも踏み出せない。

あたしらは、ちっぽけだ。苦しんでいる人を助けたいと思うのに、思うばかりで何も行動できない。昔どこかで、「思うことより、実行することが大事」ということばを聞いたことがあるけど、実際に行動することはとても勇気のいることで、ちっぽけなあたしらは、一人じゃ何もできない。だけど、一人ひとりが助けたいと強く願うようになれば、それは初めはとてもちっぽけなものかもしれないけど、その思う気持ちを大事にしていけば、それはとても大きなものに育っていくんだと思う。「一人の思いが何かを動かす力になる」。

野田恵莉　神原留美［2004年］

国内外で広く紹介されたコンテストの作品

2001年に英国で開催された日本文化紹介行事「Japan 2001」で、コンテストの写真が写真パネル展「The Way We Are Japan」として公開されました。同展は英国国内の学校や公立の図書館を巡回し、延べ10万人が観賞しました。コンテストの英国版「The Way We Are UK」も開催され、「一人の主人公を5枚の写真と文章で表現する」作品に、英国の高校生も挑戦しました。

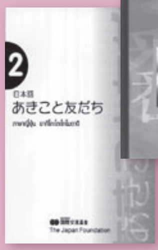
また、コンテストの作品は、現代の高校生の姿を伝える貴重な写真として、日本の英語科の教科書や海外の日本語教科書などに多数掲載されるようになりました。さらに、コンテストの参加常連校、大阪府立大手前高等学校定時制課程の写真部顧問・野村訓先生編著の本『レンズの向こうに自分が見える』が岩波ジュニア新書として出版され、コンテストに寄せられた作品も多数紹介されました。

日本の英語教科書

英国での写真パネル展

英国の高校生の作品

英国の新聞*Daily Express*が発行する雑誌*Saturday*より



タイの日本語教科書

米国の日本語教科書

高校時代の写真が、今の「土台」になっている

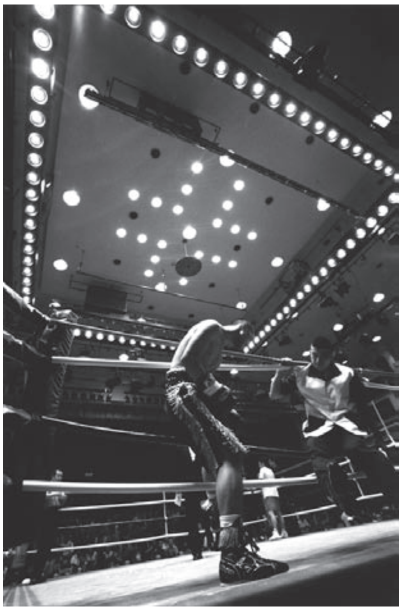
中西祐介……第1回コンテスト最優秀賞受賞者

写真通信社のフォトグラファーになって約1年、毎日いろいろなスポーツの写真を撮っています。この仕事には、写真の技術や体力が必要なことはもちろんですが、現場で最も必要なのは、コミュニケーション能力や判断力です。取材相手や他のフォトグラファーとの会話や交渉など、自ら積極的に働きかけて情報を入手し、常に的確な判断を下していくことが求められます。

仕事で撮る写真というのは、雑誌やWebに使われる報道用の写真、つまりスポーツをスポーツとして撮った写真です。でも、自分の写真として撮るときは、すべてドキュメンタリーとして人間を撮りたいと考えています。大学時代から今までずっと通っているボクシングジムでは、試合の写真だけでなく、日々の練習や選手のポートレート、そして通常、立入禁止になっている試合前後の控え室の中まで撮影します。試合前の興奮や不安、試合後の歓喜や屈辱、ジムの一員として信頼されていなければ決して撮らせてもらえない場面です。撮影する相手と個人的な関係をつくり、信頼を深め合いながら、人をじっくりと撮る。この撮影スタイルの元は、フォトメッセージコンテスト用に撮った作品です。

最優秀賞を受賞した作品「日野俊'sドキュメント」[1997年]

中学から高校にかけて、人間嫌いになった時期がありました。でも、単位制・無学年制という特色を持った新宿山吹高校に入学して、「誰がいてもいい」というみんなを受け入れてくれる校風と、さまざまな芸術を志す仲間にめぐりあいました。そして、自分は写真に打ち込むようになり、いつの間にか人を撮るのが好きになりました。そんな高校時代のこの写真が、今の自分の土台になっていて、この上に全部積み重なっている気がします。これからも、人間のドラマを撮っていきたいです。



なかにし・ゆうすけ
新宿山吹高等学校卒業。東京工芸大学芸術学部写真学科を卒業後、出版社の撮影助手を経て、2006年よりアフロスポーツ（http://www.aflosport.com/）所属のフォトグラファーとして活躍中。

今後、ますます価値が高まる写真

この10年間に集まった写真は、実に13,240枚に及んでいます。TJFは毎年、その年に寄せられた写真を写真集『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』にまとめ、国内外の教育関係者に寄贈してきました。また、海外への発信のため、近年ホームページに力を注ぎ、英語版ホームページ「The Way We Are 日本の高校生のフォトエッセイ」では、日本の高校生約80人を紹介しています。日本語教育に役立つ日本語の音声や日本文化の解説なども用意しました。また、外国語教育や国際理解教育のための写真データベース「TJF Photo Data Bank」も好評で、応募作品を含めた日本や日本文化に関する写真を現在約3,400枚掲載しています。利用登録者数は約5,900人になりました。

田沼武能審査員長は、「（作品には）それぞれの時代が記録されています。何よりも高校生が高校生を撮ったことにより、よりリアルに高校生の考え、生活感が表現されているので、今後の貴重な資料となると信じます。毎年の作品が写真集という形に残されていることも有意義なことです」と語っています。

『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』1997-2005

TJF Photo Data Bank

The Way We Are

まず一度、すべて受け入れることからはじまる

荒井聡子……第2回コンテスト最優秀賞受賞者

高校時代は、写真を撮るのも、見るのも、プリントするのも、とにかく写真のすべてを楽しんだ時期でした。写真部のみんなと合宿や撮影で、いろいろなところへ出かけるのも本当に楽しかった。そのころ、写真家の植田正治さんの写真と出会いました。植田さんが故郷の鳥取の人々や風景を、ごく普通の生活の中で魅力的に撮っていらしたことにとても感動しました。自分の身の周りにこんな魅力があるんだと気づき、自分でも撮ってみたくなったとき、偶然に出合ったのが、このフォトメッセージコンテストでした。ですから、自然な感じで、友だちをじっくりと撮ることができました。最優秀賞を受賞したことで、自分の想いがたくさんの人に伝わったと分かってうれしかったし、とても大きな自信になりました。

この春卒業した専門学校の卒業制作として、高校卒業後に東京へ来てからずっと一緒に住んでいるお婆ちゃんを撮りました。81歳になった今でも、お友だちとボーリングを楽しんだりするような、元気で都会的なお婆ちゃんです。お婆ちゃんが私にくれるのは、もう無償の愛といってもいいほど大きなものです。これまでの感謝を込めて、お婆ちゃんを魅力的に撮りたいと思って撮りました。

今は、ギャラリーの仕事に興味を持っています。私は写真を見ることが、撮ることと同じくらい好きで、今まで見たこともない、自分の知らない視点で撮られた写真に出会った時に深く感動します。写真を見るときには、まず一度すべて受け入れることを大事にしています。表面だけを見てあれこれ批判するのではなく、作者の感性や価値観といったものを受け入れることから、写真を見ることをはじめるのです。家族や親しい人の写真を家に飾っておくように、もっと自分の好きな作家の写真や写真集を身の周りに置いて楽しむことができたら素敵だなって思います。いつか、まだ誰も知らない写真家を自分が発掘して、たくさんの人に紹介するような仕事ができたらいいなって思っています。

最優秀賞を受賞した作品「大地の子」[1998年]

あらい・さとこ
北海道標茶高等学校卒業。東京の短大を卒業し、保育士として働く。その後、写真の道を志し、専門学校に入学して写真を学んだ。

コンテスト終了と今後について

「高校生のフォトメッセージコンテスト」は、今回をもって終了することになりました。これまでに参加してくださった高校生の皆さん、ご指導いただいた先生方、そして本コンテストに対し、多大なるご支援とご協力を賜りましたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

TJFは、本コンテストの趣旨を生かした事業を新規に始めたいと考えております。「身近な他者をよりよく理解し、共に生きていくことを学ぶ」という国際理解教育の試みは、世界の高校生が出会う場「つながーる」（新ウェブサイト）や、さまざまな直接交流事業へとつながっていきます。2007年8月には、世界の高校生との交流プログラム「Focus on Japan 2007」を開催します。宮城・東京・大阪・広島からグループごとに1ヵ所を選び、世界の高校生と一緒に訪ねて、人々の姿と暮らしを撮影します。今後も日本の高校生の姿や生活文化を世界に発信していくために、「TJF Photo Data Bank」をさらに充実させたり、「つながーる」内に写真や文章等の発表の場を用意します。これらの新たな試みは、コンテストにご協力いただいた写真部顧問の先生方や生徒、国際理解教育の先生方のご支援なしにはなしとげられません。今後とも、一層のご理解とご協力をお願いいたします。

http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/